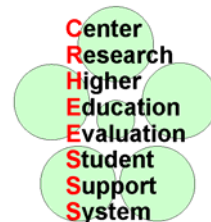


週刊センターニュース No.142



第 142 号 (2007 年 1 月 22 日) 毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第 4 回大学教育セミナーのご案内

主催：大学教育開発・支援センター

日時：平成 19 年 2 月 22 日 (木) 13 時 30 分～17 時 30 分

会場：角間キャンパス総合教育棟 D10 講義室

双方向遠隔授業システムを用い、富山大学と福井大学にも送受信の予定

テーマ：「GPA と厳格な成績評価 - 学士課程教育の実質化に向けて - 」

趣旨：大学がいかなる教育を行い人材育成の成果を上げているかについて、ユニバーサルアクセス時代を迎えた今、社会に対するより明確な説明が求められる。そのような大学教育の質保障の方策として、多くの大学で「厳格な成績評価」について議論されている。しかし、授業の到達目標に対する達成度をいかに評価するか、文系、理系にわたる多様な授業において適切な成績評価基準を設定できるのか、これらの課題についてはさらに議論が必要である。本セミナーでは、成績評価指標として普及しつつある GPA 制度の起源、原理、運用の事例について知見を得るとともに、成績評価の前提となる授業の到達目標の明確化と対応する評価基準の設定について意見交換を行う。

【プログラム】

講演(13:30-15:50)

館 昭 (桜美林大学大学院教授)

半田 智久 (静岡大学大学教育センター教授)

向 智里 (金沢大学大学院自然科学研究科教授)

シンポジウム(16:00-17:30)

情報交換会(18:00-19:30)

【申込方法】2月19日(月)までにメールにて西山(nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp)までお申込ください。情報交換会は生協南福利喫茶部にて会費 3000 円で行いますので、参加ご希望の場合は、併せてお知らせください。

現代 GP IT 教育推進プログラム 第 2 回シンポジウムのご案内

日時：2007 年 2 月 7 日 (水) (受付開始 12:30～、シンポジウム開始 13:00～)

場所：自然科学系図書館 1 階大会議室

【プログラム】 司会進行 岩原正吉 (金沢大学総合メディア基盤センターセンター長)

13:15～13:30 現代 GP の目的と今後の政策

招待講演 13:30～15:00

e ラーニングの質の向上と今後の展開

清水康敬 (独立行政法人メディア教育開発センター理事長)

信州大学における全学 e-Learning 活用教育 山本洋雄 (信州大学全学教育機構・教授)

15:00～15:50 ポスターセッション・学生 e-Learning 作品コンテスト作品紹介

会場：金沢大学自然科学研究科ホール

内部講演 15:50～17:10

金沢大学における IT 教材作成例（1） 国本浩喜（金沢大学大学院自然科学研究科・教授）

金沢大学における IT 教材作成例（2） 澤田茂保（金沢大学外国語教育研究センター・教授）

金沢大学 IT 教育推進プログラムの取組みとその成果

鈴木恒雄（金沢大学総合メディア基盤センター教授）

17:10～17:40 「学生 e-Learning 作品コンテスト」表彰式

【連絡先】金沢大学 IT 教育推進プログラム・IT 教材作成支援室

電話 076-264-6079 E-mail: it-sien@el.kanazawa-u.ac.jp

大学の教育力 - IDE 高等教育フォーラム参加報告を兼ねて

民間メディアによる大学ランキング（最近では「新指標 GP で測る 286 大「教育力」ランク」（『読売ウイークリー』2006 年 12 月 3 日付発行）のみならず、特色 GP を代表とする大学教育改革支援プログラムなど政策レベルにおいても、「教育力」は、重要なキーワードの一つになっている。その教育力を向上させるのに、これまではどちらかという FD を主とした個別対応、教員個人の努力に訴えることが多かったが、組織としての教育力がこれまでも増して大きく問われている。

例えば特色 GP に採用された取組内容（参考になるものに、大学基準協会『特色ある大学教育支援プログラム事例集』平成 16、17、18 年各年版がある。センター図書室に所蔵）を総覧すると、各大学において、大学教育で学生が何を身に付けたかを問いその能力を具体的に明示し評価する仕組みを整えようとしている。そしてさらに主に産業界を中心に能力証明としての「社会人基礎力」が注目される中で、大学は学生が社会へ円滑に移行できるよう支援（学習支援や学生支援）していく点で、「面倒見がよい」ことを前面に押し出さないといけない状況にある。

上記フォーラム（2006 年 12 月 23 日開催、主催：IDE 大学協会、国立大学財務・経営センターにて）で報告をされた濱名篤氏（関西国際大学長）によれば、大学が教育力向上のためにしなければならないこととして、「どうすれば学生が成功できるか」教職員みんなで考えさせ現状・問題分析を行い、結果を共有する「学生が達成・実感しやすく」しかも「大学ならではの」の分かりやすい学習到達目標を設定すること、そして 資源の集中・活用法、実施プラン、評価方法について計画立案するプロジェクトを立ち上げることの 3 点を挙げている。そして、全国のセミナー等で何度か取り上げられ、かなり定着したと思われる初年次教育を材料に考えていくなら、それを教育改革に繋げていく意味でも重要であるのは、学生がモチベーションや目標を獲得でき、学生自らが active learner になる仕組みを作り上げていくことにある。

また、上記フォーラムで報告をした金子元久氏（東京大学大学院教育学研究科教授）によれば、コンピテンス（一般的に、現実の文脈に基礎知識を活用し適応する能力 基礎学力（中核能力）と解されることが多い）を作る大学教育を考える場合に、カリキュラム（編成）そのもので解決しようとするのではなく、カリキュラムの中で何を与えているのか（学生に対するオリエンテーション）が重要であり、大学で勉強することが、将来の職業とどう結びつくのか分からず、学習への動機づけが少ない学生をどうするか、大学が何とかしなければならない課題であるとしている。また学生が、どのように学習して、どのように身に付けて、どのようにそれに対して考えているのか、について確かめる（学生の授業評価とは違う次元のもの）調査（代表的なものにアメリカのオハイオ州立大やカリフォルニア大の取組がある）も必要になってくるであろう。（文責 評価システム研究部門 渡辺達雄）